視　察　報　告　書

報告者氏名：　角井　基

委員会名：教育福祉常任委員会

期　　間：１０月２３日（火）～１０月２５日（木）

視察都市等及び視察項目

川崎市：市立東菅小学校の学力向上に向けた取り組みについて

姫路市：生涯現役推進計画について

高浜市：学習等支援事業について

所 感 等

川崎市：市立東菅小学校の学力向上に向けた取り組みについて

東菅小学校は多摩区にある小学校で、川崎市では人口が増えているが、この地域は人口が減っているという。その中にあって、児童数はあまり変わらず、世代交代がうまく進んでいるのかもしれないということで、昔は田んぼがあり、梨が作られていた歴史と伝統のある地域で、子どもたちがのんびりしているという話が最初にあり、以降、女性の校長から丁寧に説明がされた。

５年前から思考力の育成に取り組み、成果を上げているということで、「個の確立と他者から学ぶ」が学校の方針とのことだ。公立のモデル校としてテレビでも放映されている、川崎市の研究推進校である。

授業をした後、従来は教師が振り返っていたが、そうではなく子ども自身が振り返るように改めた。授業の１時間で自分がどう変わったのかを子ども自身が考えるのだという。「黒」であるものはいくら周りで「白」と言って「黒」と言える子どもを育てたい、それが方針と強調された。

角屋先生という専門のアドバイザーを招いて進めてきたという。子どもたちに考える方法を教えるのだと言い、それは人間性を育む思考を学ぶことで、自分の成長とは他者の存在価値を認めることであって、それに気づくような授業づくりに努めているということであった。何とも哲学的な話のようだが、要は子どもたち自身の考える力を養うことにあり、そのための授業をしているということだ。自分自身を見つめる力、他者から学ぶ力、経験や既習を関連づけて問題を発見、解決する力を

子どもたちが身につける、そのために教師が思い思いに工夫をしている。そして、子どもたちがそれに付いていっている。そこには、子どもが喜び、楽しみながら学べる工夫があるのだと思う。

実際の授業を見せてもらったが、机の配置をコの字やＶの字にしたり、先生が座って車座になったり、これまでの学校とはかなり異なる風景を見させてもらった。

また、廊下はもちろんのこと、教室の窓にまで授業で使う課題の書かれた張り紙がされ、ともかく至る所に様々な展示がされていた。あらゆる場所で教師も子どもも情報発信をするのだという。校舎そのものも、新築されて６年というのだが、本市にはない、学校のあり方を見させてもらった。

聞いてみると、今の校長が赴任してからこのような改革が始まっており、アドバイザーの存在もさることながら校長のリーダーシップによって、ここまで大きく変わったように感じられた。保護者からの評判も良いそうで、「やる気があればできる」ということが、まさに体現されていた。予算の獲得がたいへんとの話もあったが、予算がなくてもできる、本市でも、どこの学校でも「やればできる」と思われた。

姫路市：生涯現役推進計画について

姫路市は、平成１８年の合併で人口５３万人の都市となり、高齢化率は本市よりも低く、２５％である。しかし、８年前から本格的な高齢社会の到来に備え、生涯現役推進の施策を展開している。それまでは各部署がバラバラに行っていた事業を体系化し、生涯現役推進室でまとめ、統轄的に様々な事業を行っている。全体の予算規模は３０億円にもなるという。

本市でも同じように行われている事業が多いが、高齢者の作品展や芸能発表会、陸上競技場でのスポーツ大会、文化センターでのフェスティバルなどがあり、生涯現役人材バンクや帰農塾、５０代からのセカンドライフ発見セミナーもある。

また、バスなどの優待助成事業があるのだが、バスが１回５０円で乗車できる優待乗車証、8,000 円分の電車優待カードなどのいずれかを選ぶことができる。本市のふれあいパスは、市の負担が 1,000 円であり、比較にもならない。この事業だけで４億円余りを要しているそうであり、ものは考え方で、高齢者が外へ出ることによって、もし、医療費などが４億円以上低くなるのであれば、むしろ、その方がより効果的であると思われる。

これらの事業は、現在の市長が始めたもので、いわば市長肝いりの事業であるといえる。何を政策の柱としていくのか、首長の考え方によって大きく左右されるのだが、高齢者数が急激に増えていく今の日本にあって、対症療法ではなく、できる限り高齢者を介護状態にさせない、健康を維持し、高齢者自身にも喜んでもらえる施策の展開は好ましいと思えた。

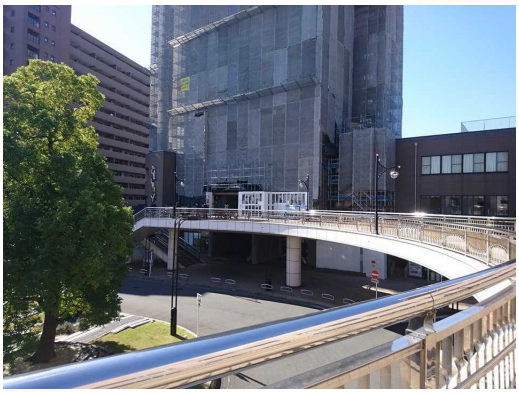
本市においても高齢者のスポーツ大会は開かれているが、アリーナでの開催であり、陸上競技場とは趣がかなり異なる。また、シルバー人材センターもあるのだが、それとは別に人材バンクをつくり、個人の技術・技能をごく身近に活かそうという手法も親しみがあり、個々の生きがいにも繋がっていくものであると思う。

ともあれ、様々な工夫をして、高齢者に生きがいを見い出してもらう、その仕組みを行政がつくる。まさに、市民の幸せづくりをしていると思えた。市長は４期目で７７歳というが、自身の年齢がそれを成さしめているのかもしれない。

本市でも、他市に倣って行うだけではなく、将来を見据えた生涯現役社会の実現に向けた施策の展開が必要であると思える。

高浜市：学習等支援事業について

高浜市は、名古屋市の南にあり、豊田市に隣接した「トヨタ自動車の城下町」である。名鉄の駅を降りてすぐの場所に「いきいき広場」という市の施設があり、市役所内の福祉関係の部署がそこに集約されている。２階、３階部分は市の施設で、その上部はマンションのようだ。



人口は５万人弱で本市の1/8くらいだが、生活保護の受給世帯は人口比で本市の1/3くらいであり、小中学校で就学援助を受けている児童生徒の割合も１０人に１人ということで、本市の支給基準が高いとはいえ、その1/2以下となっている。

市民の利便性を重視しての立地だが、利用者がワンストップで相談できるように「福祉まるごと相談グループ」で受け付け、そこで交通整理がなされている。例えば、１人の相談で介護と育児の両方に関わる相談も多く、それらが１か所で解決されている。本市では高齢福祉課に行って、それから別棟のこども青少年支援課へ行って、ということになり、連携しての相談はできない。

生活困窮家庭への学習支援は、これまでキャリア教育で実績のあるＮＰＯ法人に業務委託されている。中学生・高校生が対象であり、現在の利用者は４０名で、毎週土曜日の９時から１６時まで開かれており、夏休み中は火・木・土の週３回開かれている。

学習支援が主で、昼食も提供しており、月１回程度のイベントも行われている。食事は１食１００円で、地域の団体が協力して行われている。７時間もずっと勉強しているのかと疑問に思って聞くと、「好きな時間だけくればいい」ということになっているそうだ。

利用日の朝と夜は食事を出していない家庭もあると聞いて、子どもたちの置かれている深刻な状況が想像される。しかし、本市の場合は、もっと多くの子どもがそのような状態にあるのではないだろうか、と心配される。

学習支援の体制は、責任者１人、支援する職員が２名いて、主に教育学部の学生４～８人がボランティアで勉強を教えている。元校長の方に学習支援員をお願いして、うまく機能しているということであった。

また、昼食提供の支援をより多くの市民で広く支える仕組みとするため２年前には「こども食堂支援基金」が立ち上げられ、こども食堂ができて支援の輪が広がっている。

学習支援もさることながら、子どもの居場所になっていて、そこに来ることが楽しみになっているとの話だった。もともとは中学生が対象だったが、高校生まで広げ、小学校版もできているそうだ。

貧困家庭の子どもたちの置かれている状況があまりに厳しく、貧困の根本的な原因は正規・非正規に大きく２極分化されている雇用の実態にあるのだが、改めてその点を解決しなくてはならない必要性を感じた。

本市においても、生活困窮世帯の子どもへの学習支援が最重点の施策と位置付けられているが、子どもたちが自ら進んで来るような居場所にしていくという視点が大切であると思える。